

趙州「狗子仏性話」の展開

——真歇清了による表詮と遮詮の統合——

若 山 悠 光

一 はじめに

「僧問、狗子還有仏性也無。州曰、無。」という「狗子仏性話」は、看話禪を代表する「無字の公案」と呼ばれ、『無門関』第一則にも選ばれ最も人口に膾炙した。しかし原典の『趙州録』は必ずしも「無」のみではなく、後の禅僧の語録にも「狗子仏性有」とするものがある。本稿では「狗子仏性」が有無双方に展開した様子を整理し、相互の交錯に注目した。さらに大慧の黙照禅批判に対抗して書かれた真歇清了の『信心銘拈古』による「狗子仏性話」について検討する。

二 『趙州録』「狗子仏性話」と禅宗史上の展開

原典『趙州録』には、「狗子仏性話」が二箇所に見られる。

一 問、狗子還有仏性也無。師云、無。学云、上至諸仏下至螻蛄子皆有仏性、狗子為什麼無。師云、為伊有業識性在。（秋月龍珉訳注『趙州録』、一三〇頁、筑摩書房、一九七九年）

二 問、狗子還有仏性也無。師云、家家門前通長安。（『同』卷一四「趙州録」、同、二九四頁）

一では、「悉有仏性」という『涅槃經』の教義にも拘らず、狗子には業識性がある為に仏性が無いと言う。また二では、すべての道が長安（成仏）に通ずるとし、仏性有りとされる。すなわち『趙州録』では有無両方の答えが見られる。

『禅門拈頌集』にはこの話について各禅僧の頌があり、解釈の違う二つの流れがある。一つは、五祖法演・真浄克文・竹庵士珪・大慧宗杲・無門慧開等、主に臨済宗を中心とする禅僧たちの「無」のみを強調した流れである。法演は上記一の問題全体を引用した上で「無字」の参究を勧める。大慧は一の問答の前半のみを引用し、有無を超えた「絶対無」・意味を捨象した「無理會話」として「狗子仏性」を公案化し、それを中心に「看話禪」という新しい禅思想を成立させた。

僧問趙州、狗子還有仏性也無。州云、無。此一字子、乃是摧許多

悪知悪覚底器仗也。不得作有無会、不得作道理会、不得向意根下思量卜度、不得向揚眉瞬目处探根、不得向語路上作活計。（『大慧書』答富枢密、大正四七—九二—c）

また無門慧開がこの話を『無門関』第一則に取り上げたことから「看話とは趙州無字を見ること」とさえ言われた。⁽¹⁾

一方、興善惟寛（嗣馬祖道一）、龍濟紹修（嗣羅漢桂琛）、大洪報恩、宏智正覺、真歇清了、万松行秀等は「無」に限定せず、有・無の両方を取り上げた。興善惟寛は趙州より先に狗子仏性の問答を為し「有」と答える。但し後半は別話である。

「狗子有仏性話」が初めて見られるのは『宏智録』で、宏智は趙州自身の語として「有」と答えるが、これは『趙州録』に明言されていない。宏智の創作かといえはそうとも言えない。『禪門拈頌集』広靈希祖の上堂中の龍濟紹修（修山主）の別語に、修山主の語として「有」が見え、しかも「知而故犯」という理由が記されている。宏智は「平展演、大鋪舒」と頌し、趙州が有と無を公平に提示し大いに店を開いたとする。

復拳、僧問趙州、狗子還有仏性也無。州云、有。僧云、為甚撞入者箇皮袋。州云、為他知而故犯。又僧問、狗子還有仏性也無。州云、無。僧云、一切衆生皆有仏性、為甚狗子却無州云、為他有業識在。頌曰、狗子仏性有、狗子仏性無。直鉤元求負命魚。逐氣尋香雲水客、嘈嘈雜雜作分疎。平展演、大鋪舒。莫怪儂家不慎初。指点瑕疵還奪璧、秦王不識蘭相如。（『宏智録』頌古、名著普及会、八八頁）

宋代この公案の解釈は「無」一色になっていくが、その理由として入矢義高氏は「禪といえは何でもかんでも断滅せよ、滅却せよ、放下せよという否定一点張りの教えだと受け取られる傾向があった」ことを指摘する。このような否定方式を「遮詮」、逆に肯定方式を「表詮」と言い、永明延寿も『宗鏡録』や『万善同帰集』で遮詮重視の風潮を非難しており、十世紀には既にこの傾向があったようである。⁽²⁾

三 真歇清了の「狗子仏性話」

以上の展開を踏まえ、真歇清了（一〇八八—一一五一）の「狗子仏性話」を検討する。真歇は丹霞子淳の法嗣で宏智正覺の兄弟子にあたり、宏智と共に默照禪の双璧とされる。宏智が撰した真歇の「塔銘」に「語録両集、世に行わる」とあり、真歇には語録が二冊存在したと伝えられる。一冊は著者がカラホト本を底本に『駒澤大学禪研究所年報』二五号（二〇一三年）に「『真州長蘆了和尚劫外録』定本作成の試み」として発表した『劫外録』であり、他の一冊は『一掌録』として刊行されたが散逸し現存しない。今ひとつ真歇には『信心銘拈古』が伝えられている。現在知られる限り「狗子仏性話」への言及は『拈古』のみである。

その成立時期を、宏智・大慧の「狗子仏性話」と比較してみよう。『宏智録』中の「狗子仏性話」は、卷二「泗州普照

覚和尚頌古」(宣和六年、一一二四)と巻一「長蘆覚和尚小参」(建炎二年、一一二八)に見える。一方、『大慧普説』巻三には、悟りを信じなかった十三人を次々に悟らせたのを契機として「山僧從此話頭方行、每与人説。」(宋版八丁左)とあり、『大慧書』答富枢密には、黙照禪から救い出す方法論として、「狗子仏性話」を用いるようになったことが記されている(大正四七―九三a)。大慧の黙照禪批判は、紹興四年(一一三四)、真歇に招かれた雪峰山普説の直後からなので、宏智の「狗子仏性話」よりも後と言え。これに対し真歇の「狗子仏性話」が見られる『信心銘拈古』には、「当紹興間、妙喜正統東山、詆訾黙照。寂菴是挙可謂入其室操其戈、取其矛擊其盾。覽者当自得之。(義遠)敬跋。」(続藏一二四―三二八右上)という、天童如浄の法嗣である義遠の跋がある。ここで妙喜とは大慧、寂菴とは真歇であり、大慧の批判に対し真歇がその手の内を利用して抗弁したとあることから、『拈古』は少なくとも紹興四年以降の撰述となる。すなわち、この三者が「狗子仏性話」を取り上げたのは、宏智・大慧・真歇の順と言える。

次に内容を検討しよう。真歇は『信心銘』の次の二句の拈古で「狗子仏性話」について述べている。

「有即是無 無即是有」

拈云、(中略) 只如僧問趙州、狗子還有仏性也無。州云、有。僧云、既有為什麼撞入這皮袋。州云、為伊知而故犯。又僧問、狗子

趙州「狗子仏性話」の展開(若山)

還有仏性也無。州云、無。僧云、一切衆生皆有仏性、狗子為什麼無。州云、為伊有業識在。而今兄弟皆道、後面是蓋覆語、緊要只在有無處。苦哉、滅胡種族。有什麼交涉。要見三祖趙州麼。收取詩書歸旧院、落花啼鳥一般春。

「若不如是 必不須守」

拈云、(中略) 又云、恁麼恁麼。無位真人常在面門出入。無昼無夜、無動無靜、念念進向、念念現前、念念相應、念念守護。有之与無自然一串穿却。你若狂狗逐塊、隨語生解、便是挽家散宅、落在今時、不能与主人翁相應。如何得不落今時。良久云、月色靜中見、松声清夜聞。(続藏一二四―三二七右下)

第一に真歇は宏智と同じ「狗子仏性話」をそのまま引用しており、「有無併記」の立場に立つと言える。そして「而今兄弟皆道、…緊要只在有無處」として、無の部分のみを強調した看話禪を批判する。「滅胡種族」とは仏法を滅ぼすの意で、大慧が趙州「狗子仏性話」に関して詠んだ頌古の一句をそのまま批判として大慧に返したものである。

趙州狗子無仏性。頌云、有問狗仏性、趙州答曰無。言下滅胡族、猶為不丈夫。(『大慧頌古』、大正四七―八五一c)

第二に「要見三祖趙州麼」として、趙州「狗子仏性話」の真意が三祖『信心銘』にあるとする。趙州は『信心銘』七三句中八句を『趙州録』に引用しており、『臨濟録』や『宛陵録』には各三句ずつしか引用がないのと比べ極めて多い。また『信心銘』の冒頭は「至道無難、唯嫌揀択」であるが、『碧巖

録』には二則と五七則に「趙州至道無難」、五九則に「趙州唯嫌揀択」がある。『碧巖録』百則中、三則も同じ主題は外に例がなく、趙州と『信心銘』の関係の深さが窺われる。

第三に真歇は、有無を貫く真理として『臨濟録』の「無位真人常在面門出入」を挙げる。「面門」とは六根を指す。小川隆氏は言う。

六根を通じて常に出入している「無位の真人」とは、間断なくはたらく仏性の作用（中略）を擬人化したものに外ならない。⁽³⁾

つまり仏性の有無を論ずる以前にある生き生きとした六根の働きに注目するのである。昼夜・動静に拘らず六根の働きは有り、有りながら念念進んでは消えて行く。ここに有無は一串に穿却される。その六根の働きそのものを仏性とした馬祖禪の「作用即性説」と、それとは次元を異にする本来の自己として仏性を捉えた石頭禪は唐代禪の二大思想である。

そうした紛糾を、生きて作用する「主人公」という形象によって集約し統一しようとしたものの、それが臨濟の「無位の真人」（中略）ではなかったか。⁽⁴⁾

真歇に当時その意識があったかは不明だが、現代の新しい研究成果を踏まえればそのような解釈が妥当と考える。

四 小結

以上、「狗子仏性話」について、「無」の流れ（遮詮）と、「有

（表詮）無（遮詮）併記」の流れがあり、両者が大慧と真歇の時点で交錯したことを明らかにした。「有無併記」の流れの中で、宏智が遮詮と表詮を並べ提示したのを受け、真歇は両者を統合し、趙州「狗子仏性話」の根底にある思想は『信心銘』であるとした。宏智のそれは黙照禪批判以前の撰述の為、真歇こそが、宋代主流となった「無」の流れに対し「有無併記」の流れの思想的根拠を示した事になる。ここに禪宗史上の意義を認めたい。大慧が「無理會話」という新たな禪思想を生み出したのに対し、真歇は『信心銘』という禪宗祖師の語録に回帰し、唐代禪思想の総括をもって解釈したと言えよう。

- 1 柳田聖山「無字の周辺」『禪文化研究所紀要』七、一九七五年。
- 2 入矢義高「遮詮と表詮」『自己と超越』所収、岩波現代文庫、二〇一二年。
- 3 小川隆『臨濟録——禪の語録のことばと思想——』岩波書店、二〇〇八年。
- 4 小川隆『語録のことば——唐代の禪——』禪文化研究所、二〇〇七年。

〈参考文献〉平野宗浄「狗子無仏性の話をめぐって」『禪学研究』六二、一九八三年。廣田宗玄「『狗子無仏性話』に関する考察——看話禪における『無字』にこめられたもの——」『臨濟宗妙心寺派教学研究紀要』第三号、二〇〇五年。

〈キーワード〉 狗子仏性、趙州從諗、真歇清了、『信心銘拈古』

（駒澤大学大学院）